

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の人切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思ひます。
今回は木曽川の清流と緑にかこまれた山紫水明の八百津町から、
木曽川の舟運やダム建設の歴史を紹介しします。
明治改修第六篇はその総集編としてデレーケの功績を特集しします。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《八百津町》

◆木曽川の変貌とともに変わりゆく八百津町

AREA REPORT

◆木曽川の水力発電の歴史とともに

気ままにJOURNEY

◆美しい川面に映る、問わずがたりの人間模様

歴史ドキュメント

◆近代砂防の祖、デレーケの功績

TALK&TALK

◆波瀾万丈の生涯を送ったヨハネス・デレーケの素顔

民話の小箱

◆星降る村のとうもろこし畑

木曽川の変貌とともに変わりゆく八百津町

木曽川最奥の川湊を擁した八百津町は、まさに木曽川舟運の一大拠点。全同でも最大規模を誇った木材流送の要・錦織、恵那へ、木曽へ、物流の一大集積地として栄えた東濃の商業の都、久田見。しかしながら、その繁栄も木曽川の変遷とともに変貌を遂げ、現在は、丸山ダム、そして計画中の新丸山ダムを擁する町へ。平成七年から「水と緑と文化の調和した心豊かなまち・やおつ」をめざして、多彩なプロジェクトが進行しています。



八百津町の地区と川

八百津の町のあらまし

八百津町は岐阜県の南東部、加茂郡の南部に位置し、総面積の八二・五％を山林が占める農山村地帯です。町の南部には木曽川が北部には飛騨川が流れ、海拔二〇m前後の盆地平野と、木曽山脈に連なる五〇〇m前後の山岳地帯から形成されています。

先土器時代から縄文時代にかけての複合遺跡は、木曽川沿岸を中心として二三ヶ所。水便のよい高原地帯と段丘崖麓泉のある河岸段丘上の陽当たりよい地帯を中心に発展してきたのです。

八百津町の中央部久田見の越水遺跡からはナイフ型石器や彫器、尖頭器などが多数発見されており、特に昭和三四年に発見された先土器時代の石刀（フレイド）は、八百津町の考古学研究史上大きな役割を果たしています。

古墳時代の遺跡の特徴としては約二〇ヶ所にのぼる祭祀遺跡、勾玉、剣、鏡などの石製品が多数出土しています。この祭祀遺跡群は木曽川流域でも八百津以外に見当た

らず、八百津でも特定地域に集中していることから、その性格が単に川神への祭祀だけではなく、大和朝廷との関連を類推することができます。

というのも、四〜六世紀は大和朝廷が東国制定のために官用道路を整備した時期に当たり、八百津祭祀遺跡群は当時の官用道路である古東山道の木曽川渡河地点にあったと考えられるからです。当時の古東山道のルートは今もつて不明であり、今後の検討を要しますが、この祭祀遺跡と関連づけて考えれば、木曽川の渡河地点を八百津に求めることは、極めて必然性が高いといえましよう。このように、八百津の歴史は木曽川とともに形成されたもの。木曽川の舟運と主要街道の要衝地点として独自の発展を遂げています。

建武二年（二三三）、鎌倉を占拠していた足利尊氏は建武政権に反旗をひるがえし、そのため新田義貞は尊氏征伐に向かいます。この時、東山道を進んだ軍勢の中に、伊岐津志氏の名が見えます。この伊岐津志氏とは当時の武人（地頭であろう）で、八百津の伊岐津志に館を造り住んだので、この地名を姓としたのでしょう。下つて観応二年（二三五）には南朝方伊岐津志氏の居城伊岐津志城を北朝方が攻めており、木曽川をはさんで丸山には、南朝方今峰又太郎の居城であったと伝えられる今峰城が存在。当時は南朝方の一拠点であったことが知られています。

やがて室町時代には土岐氏、斉藤両氏の勢力下に。太平の江戸の世には、苗木藩、尾張藩、幕府直轄領などに複合統治されています。

木曽川舟運の一大拠点・錦織綱場

錦織綱場とは木曽材を流下するための筏基地。木曽山林の木材が陸送できなかった時代、河川こそ最も至便な交通手段。その運材施設として、あるいは通関及び使用料取り立ての施設として形成されました。この綱場の歴史が即、木曽川における木材

もなつて、全国各地で仏教排斥運動がひきおこされました。中でも苗木藩は全国でも稀な徹底した廃仏毀釈を実施。当時苗木藩領であった福地、潮南は大きな被害を受けています。

明治四年には廃藩置県が行われ、苗木藩領は苗木県、尾張藩領は名古屋県に所属。その後幾多の変遷を繰り返し、昭和三年は現在の八百津町が成立しています。

こうした時代の変遷に伴って、八百津町も変貌を余儀なくされました。江戸時代から隆盛を極めた木曽川の舟運も、やがて陸上交通の発達とともに衰退し、東濃の商業の中心地、八百津の歴史も幕を閉じることになり、その後の産業の主流は、以前から行われてきた養蚕業へと移行します。大正九年には製糸工場も創立され、逐次小規模な製糸工場も増加していきます。

しかしながらこれも日中戦争、第二次世界大戦のおりを受けて衰退し、戦後になると、戦前から計画されていた丸山ダムが昭和三年に竣工。ダムの建設により誕生した丸山蘇水湖は、木曽川・飛騨川添いの飛

◆発電所に一生を捧げた三浦堅次郎◆

三浦堅次郎は明治六年、八百津町商村下立の生まれ。大正時代中期、木曽川の左岸にある谷間の川の流れを利用して、自分で発電所をくり、草深い下立の村にはじめて電をつけた。

下立は八百津町から木曽川を十kmほど上った所にあり、養蚕の盛んな所でした。農家の男に生まれた堅次郎は、一八歳のとき、父から田畑・山林をもらって蚕を飼ひ、ついに村一番の財産を築き上げました。

幼少の頃から水車に深い関心をもっていた堅次郎は、木曽川に流れ込む谷間の流れを利用して、水車を回し水力発電所を作ろうと決心しました。そう思いつくた財産の八割を売り払い、大正四年には、横回転の発電機を買



三浦堅次郎

い入れて工事を完成させました。しかし、村人たちは『堅次郎は気が狂った』と誰も相手にしてくれま

いので堅次郎は隣の峰の人たちに話をし、八mの送電線をひいて、電氣を使つてもらうことにしました。草深い村には電氣が灯つたのです。ところが三〇分もたたないうちに電氣は薄火に、怒つた村人たちは「なんだ、この光りは」と石を投げつける有様です。大失敗の原因は、晴天が続き川の水が少なくなると、勢いよく発電機を回すことができず、電力が足らなくなつたからです。しかし、そんな失敗にへこたれた堅次郎ではありせん。残っていた財産を売り払い、借金をした上で、年間、各地の発電所を見て回り、再び工事を始めました。そしていよいよ竣工。ダム式貯水によるタービン式縦回転の発電機を備えたのです。今度は大成功です。八〇軒の家々に明々と電氣が灯つたのです。今まで馬鹿にしていた村人も、電灯を灯てほしいと頭を下げて頼んできました。電灯の魅力を知らなかった堅次郎は、自分の財産を使い果たしても、電氣のありがたさを広めることがたつたの願ひ、堅次郎の血のじもつたような努力で、山村には電灯が灯り、人々の暮らしはみちがえるようになりまし

た。堅次郎は昭和三年、発電機の修理中に感電し、五六歳でこの世を去りました。

ふるさとの町・探訪記



黒瀬湊の灯台

木曽街道は黒瀬を起点とし、細目を経て荒川を渡り、中山道に連絡する線で、現在はこれを八百津・太田線と呼んでいます。久田見街道は黒瀬を起点とし、現在の岐阜県白川町を起点とし、久田見村を経て現在の八百津町に達する線。木曽街道とは久田見村で接続しており、通称黒瀬街道と呼ばれています。当時の文献によれば、黒瀬は「商家多く繁盛なる湊也」とみられるように、木曽川舟運の一大拠点として栄え、下流の大

山・笠松・宮・桑名・四日市などを往復する船でにぎわっていました。

船手段を含めた輸送技術の改善が行われました。しかしながら、慶長一七年美濃の運材の用地鶴沼・円城寺が尾張藩領となつた頃から山村支配が崩れ始め、運材期間や流出材の廻送をめぐり出先役人の間で紛争が起きるほど。寛文五年（一六六五）に尾張藩直轄となり錦織材木奉行が置かれると、民材の運上徴収や筏造りの調節など、運材の統制業務は尾張藩によって徹底されました。こうした尾張藩による木曽川支配と木材流送、舟運の支配は、開明の明治維新まで続きますが、大正時代に入り鉄道開発や水力発電開発が進められるようになると、華麗な錦織綱場の歴史にもついに終止符が打たれることになりました。

活況を呈する黒瀬湊

錦織綱場が運材の一大拠点なら、黒瀬湊は物産の一大集散地。木曽川最奥の河湊として、江戸時代より明治中期に至る約二三十年間、東濃の首都として全盛を極めました。この発展は、木曽街道、久田見街道などの陸路が集まる久田見村を黒瀬の後方に擁していたことも一因です。

木曽街道は黒瀬を起点とし、細目を経て荒川を渡り、中山道に連絡する線で、現在はこれを八百津・太田線と呼んでいます。

久田見街道は黒瀬を起点とし、現在の岐阜県白川町を起点とし、久田見村を経て現在の八百津町に達する線。木曽街道とは久田見村で接続しており、通称黒瀬街道と呼ばれています。当時の文献によれば、黒瀬は「商家多く繁盛なる湊也」とみられるように、木曽川舟運の一大拠点として栄え、下流の大

山・笠松・宮・桑名・四日市などを往復する船でにぎわっていました。



八百津町空撮

苗木藩の江戸回米はこから船で桑名へ運んで江戸へ回漕され、藩内の生活物資はここに陸揚げされて、木曽街道や黒瀬街道を経て村々へ運ばれていました。こうした街道筋には問屋も立ち並び、鈴を鳴らして通る駄馬の列は、この軌道の繁栄を物語る風物詩。その要衝の地である久田見村は、田畑乏しき山村なれど、物資の集散地としてにぎわいをみせ、商業の町として発展を遂げました。

久田見のだんじりまつり



久田見だんじりまつり

久田見は木曽川やそれに注ぐ谷川が深く切れ込んだ山間の農村で、近世になると中心地である中森集落は立派な市街地を形成していました。この市街地の東端に鎮座するのが神明神社で、四百年以上の歴史を誇ります。

もともと、からくりや狂言、踊り、地芝居などが盛んなところでありましたが、その中でも最も華やかであったのが、神明神社の祭典・久田見まつりです。天正一八年（一五九〇）、美濃三人衆の一人に数えられた稲葉一鉄の第三子、右近方通が細目、久田見などを領有した時、久田見は山中には珍しい大邑であるというので、都会にならつて現在のまつりを始めさせたと伝承されています。

この祭りの特徴は「だんじり」と「糸切りからくり」。『だんじり』は六輦あり、振獅子や神馬とともに神前にひかれ、『だんじり』の上で順次「からくり」が競われるもので、「糸切りからくり」は国の選択無形文化財、岐阜県の無形文化財に指定されています。

産業の隆盛は木曽川とともに

明治初年、祭政一致をスローガンとする新政府の神道国教化政策・神仏分離政策にと



綱場での木曽材繁流と編筏の様子

驛木曽川国定公園とともに、新たな観光スポットとして脚光を浴びています。

現在は国から農業振興地域の指定を受け、農業の近代化に積極的な取組を見せています。平成六年九月には「八百津町第三次総合計画」も策定され、「水と緑と文化の調和した心豊かなまち・やおつ」をめざして多彩なプロジェクトが進行中。新丸山ダム建設に伴う国道四一八号の早期建設、東海環状自動車道へのアクセス道路の整備の促進、上水道の安定供給などの事業が着々と進められています。

■参考文献

- 『八百津町史』通史編、史料編 八百津町発行
- 『わたしたちのまち 八百津町』八百津町教育委員会発行
- 『八百津町の文化財』八百津町教育委員会発行
- 『八百津町町勢要覧』八百津町発行
- 『錦織綱場Ⅱ 木曽川筏流送の歴史Ⅱ』八百津町教育委員会発行 錦織綱場保存会
- 『岐阜県地名事典』角川書店発行
- 『新編 富田用水史』富田用水土地改良区発行
- 『日本人名事典』リサイス発行

木曽川の水力発電の歴史とともに

近代日本の道のりを歩み出した明治政府は、水力発電を奨励。

送電技術の発達に伴い、

木曽川初の八百津発電所が建設されました。

その後も電力需要は増加の一途を辿り、

丸山発電所、

新丸山発電所などが相次いで建設され、

現在では、

洪水調節機能、流水の正常な維持、

発電などを目的とした

新丸山ダム事業が着々と進められています。

◆日本の電気事業のはじまり

わが国で初めて電灯が点灯したのは、明治二年三月二十五日。電信中央局の開業祝宴会が工部工学校（後の東京大学）ホールで開催され、その席上、フランス製のアーク灯がグロープ電池を用いて点灯されました。その後、この日をもって電気記念日としています。

明治一九年には東京電燈が開業し、電気の供給が始まります。電灯は人口の多い都市部が主で、発電方式も火力発電が主体。当時の産業界は紡績を中心としたわが国史上稀にみる輸出超過の好況下であり、一大投資時代を迎えつつありました。このような時代を背景に、やがて各地に電気事業が広がります。

中部地方においても、後の木曽川の水力発電を行うこととなる大同電力㈱や東邦電力㈱の前身となる名古屋電燈㈱が、東京電燈に遅れること四年の明治二〇年にわが国二番目の創立許可を受け、発足しました。

電気事業に水力発電が利用されたのは、明治一四年に竣工した京都の蹴上発電所が最初。その後、日清、日露戦争による石炭価格の高騰や政府の水力発電奨励により、次第に全国へ普及していきます。しかしながら送電技術が未発達な当時において、水力による電源を、人口密度が低く、需要地から遠い河川中上流部に求めることは不可能に近く、こうした地理的条件から、当初の電力の主流はもっぱら火力に頼らなければならぬ状況にありました。

一方送電技術は、明治二四年、フラン

クフルト博覧会場からミュンヘンまでの一七、五kmの送電に成功して以来、その技術力は向上の一途を辿りました。日本においてもその傾向は同様で、明治三四年には広島水力電気が、呉、広島間二四kmの送電に成功。河川の中上流部という発電地点の地理的制約は解消され、ようやくその緒を得たのでした。

◆木曽川最古の八百津発電所

このように順次発展してきた電気事業の将来性に着目した中部地方を中心とした財界が、木曽川の水力を利用して発電し、それを名古屋市内内外へ供給することを目的に名古屋電力㈱を設立させました。同社は明治三七年七月、八百津町地点に水力発電用水路の新設を岐阜県知事に依頼し、三九年六月に許可を得て、大容量水力開発の一端としてかつ、木曽川での最初の発電所となる木曽川発電所（大正六年に八百津発電所と改称、以下八百津発電所に統一）の建設に着手しました。

ところが、名古屋市内にはすでに先述の名古屋電燈㈱が営業を開始しており、この二社の競合は避けられません。しかしながら名古屋電力㈱の資金不足も手伝って、同社は名古屋電燈㈱に吸収合併されることに。八百津発電所は明治四四年、出力九六〇〇kwの発電所として名古屋電燈㈱によって完成されました。この名古屋電力㈱と名古屋電燈㈱の吸収合併、八百津発電所の完成には、後に電力王と呼ばれる福沢桃介(KIISO 一三三三―四頁参照)が深く関与しています。

しかし、当時は水力発電の専門技術が確立しておらず、八百津発電所の設計も築港関係や鉄道関係の土木技術者が集まって行われたもの。また、当時は鉄道も



丸山ダム



建設中の丸山ダム(昭和28年)

◆本格的近代化を図った我が国最初のダム・丸山ダム

丸山ダムは、昭和三年に完成した高さ九八、二mの重力式コンクリートダムであり、戦前から戦後にかけてわが国最初の大型機械により施工されました。ダムサイトは飛騨川との合流地点より一五km上流地点の木曽川本流に位置。上流、笠置発電所(昭和二年完成)の間の残存落差を利用し、丸山発電所(出力三万kw/昭和二九年完成、新丸山発電所(出力六万三kw/昭和四六年増設で発電するとともに、洪水調節機能を有しています。

ダムの着工は昭和十八年。日本発送㈱により工事は開始されましたが、昭和一九年五月、戦時下の建設資材不足が原因で、やむなく中止されました。戦後の深刻な電力不足を背景に、昭和二六年九月工事は再開されました。

丸山ダムは、その設計・施工に本格的な近代化を図ったわが国の戦後最初の高ダムで、わが国大ダム工事の幕開けとして、数々の新しい技術上の足跡を残しています。



昭和58年台風10号による洪水



新丸山ダムの予想図

◆明日への扉を開く新丸山ダム事業

昭和五八年九月二八日、台風十号は秋雨前線を刺激して大雨を降らせました。時間雨量三〇mmから四〇mの降雨が数時間断続的に続き、木曽川の中流域では三〇〇mmを越える大雨となったのです。それに伴い、木曽川の水位は上昇を続け、今渡水位観測所(岐阜県美濃加茂市)が流出し観測不能になったのを始め、犬山市、笠松町で、既往最高記録となりました。

これは従来の木曽川の洪水の中でも最大出水で、岐阜県美濃加茂市をはじめ各地で大災害が発生しています。その一方、昭和五二年、五九年、六一年には深刻な水不足も頻発。このような状況から、河川改修事業と併せて、上流ダム群による洪水調節と流水の正常な機能を維持するための水の確保が急務となっています。

新丸山ダムの建設事業は、この治水事業の一環として行うとともに、現在の丸山、新丸山発電所の出力の増強を図るもので、昭和五五年度から実施計画調査に入り、昭和六八年度に建設省直轄の多目的ダム建設事業として建設に着手しました。平成二年五月には多目的ダム法に基づく基本計画が決定し、平成四年三月二七日に一般補償基準の妥結調印に至っています。

す。また、平成六年一月二二日には、水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備計画が決定されました。

新丸山ダムの建設地点は現在の丸山ダムより四七、五m下流側に二四・三m嵩上げします。大規模な多目的ダムとしては日本一の嵩上げとなります。

しかしながら、丸山ダムが木曽川本流の洪水調節をする上で重要な役割を担っているとともに、一八万八千kwという大規模な発電を行っていることから、工事期間中もその働きを維持しなくてはなりません。このため、新丸山ダムは現在の丸山ダムの機能を維持しつつ、ダム軸を下流側にやや移動して嵩上げる工法を採用しています。

特に、現在のダムと新しく造るダムのゲートと、相互に利用して洪水調整を行う画期的な施工方法が、今回初めて採用されたのです。

◆新丸山ダムの事業目的

一、洪水調節

木曽川を洪水から守り、地域の安全性を向上します。新丸山ダム下流域を水害から守るため、ダム地点における計画高水量毎秒一萬mのうち毎秒四千二百mを調節します。

二、流水の正常な機能の維持

木曽川を渇水から救い、清らかな流れをめざします。渇水の時、木曽川下流沿川の用水の安定的な供給を図り、また、河川の環境を守るために、必要な水補給するための容量一五(一) mを確保します。



三、発電

地球環境に優しいクリーンなエネルギー（水力発電）をさらに生み出します。

新丸山ダムによって増えた水の高低差を利用して新たに二万二千五百kwの発電を行い既存のもの合わせて、合計二万五千kwの発電を行います。

◆新丸山ダムの建設は地域振興とともに

新丸山ダム建設によつて整備される道路は、ダム建設に利用されるだけではなく、地域の発展にも大きく貢献することになります。

平成六年には一般国道四一八号八百津バイパス原石山線、平成七年度には工事用迂回路・町道新大峰線支線が開通。これにより、地域の交通網が整備されるとともに、周辺地域の発展にも大きな期待が持たれます。

さらに、地域の一層の向上を図るため、多彩な整備事業が計画されています。

また、水源地域対策特別措置法に基づく水源地域整備計画により、二事業、道路整備、土地改良、公園、下水道等が進められます。

■参考文献

- 『木曽三川流域誌 建設省中部地方建設局発行』
- 『木曽三川とその流域と河川技術』建設省中部地方建設局発行
- 『八百津町史 通史編 八百津町発行』
- 『新編 宮田用水史』宮田用水土地改良区発行
- 『中部電力のあゆみ―福沢桃介の生きた時代―』第一回講演報告資料集
- 主催 中部産業遺産研究会・東海産業考古学会
- 『明日への扉を開く新丸山ダム』建設省新丸山ダム工事事務所



旧八百津発電所

EVENT GUIDE

八百津(だんじり)祭り

●4月第1土・日曜
●大船神社

本郷・黒瀬・芦渡の3輦のだんじりが大船神社に勢揃い



久田見祭り

●4月第3土・日曜日
●神明神社／白鬚神社

呼び物は糸切りからくり。国の選択無形文化財、岐阜県の無形文化財



蘇水峡川まつり

●8月第1土・日曜日
●木曽川蘇水峡

木曽川に珍しく万灯やまきわら船が浮かぶ



産業文化祭

●11月中旬の土・日曜日 ●八百津町役場

町の特産物、八百津せんべいや栗きんとんなどの即売や、芸能発表会などのアトラクションが行われる。

※行事についてのお問い合わせは、
八百津町役場企画課 0574-43-2111



●公共交通機関利用●
名鉄／新名古屋駅→八百津駅 約45分
バス／JR美濃太田駅→八百津町 約36分

●マイカー利用●
中央自動車道土岐インター→→→国道21号→→→八百津町 30分

気ままにJOURNEY

人に漏らすことはありませんでした。杉原千畝の日本での名誉回復がなされたのは、没後五年を経た一九九一年のこと。昭和史に置き去りにされた功績を後世に伝えようと、八百津町は、丸山ダムのほとり、町を一望できる小高い丘陵に、人道の丘公園を建設しました。そのモニュメント、パイプ楽器は、今も世界へメッセージを送り続けています。「すべての人々が平和で穏やかでありますように」



杉原千畝氏の胸像

●人を切らずして己を切る……………宮本武蔵
センプオスギハラが昭和のヒーロー。二刀流を創始した剣豪宮本武蔵はこの地で剣の極意を極めた、という伝説が残されています。伝説の地は、りんご山大仙寺。その昔、京の都で剣術に明け暮れた宮本武蔵は、精神の修業、即ち、禅の道を極めるため、臨済宗大徳寺派の館長、沢庵和尚について、禅を学んでいたのだとか。しかし、晩年を迎えた沢庵和尚は、「禅の極意は愚堂に習え」と遺言を残して、この世を去りました。愚堂国師は大徳寺派の沢庵和尚と覇を競いあう妙心寺派のヒーロー。禅問答にかけては並ぶことのない、と称せられた当世きつての僧です。彼は時の領主稲葉一鉄の招きにより、八百津を訪れ正伝寺を開いた後、大仙寺を中興。その愚堂に教を乞うために、武蔵はこの寺の門をたたいたのです。いかにも禅寺らしいどっしりとした惣門、宝暦年間（七五二〜六四）に創建されたという山門



宮本武蔵ゆかりの大仙寺

をくぐる、武蔵が修業したという、つややかで平板な座禅岩が門前にひっそりと。三日間の庭詰めを経て入門を許された武蔵は、この座禅岩で、禅の極意、いや、剣の極意を極めたのです。天下を分けた関ヶ原の合戦の残党として、逃避行を続けた武蔵。禅宗の僧侶として混乱の時代を問い続けた愚堂和尚。彼らが殺戮の果てに見出したものは、「人を切らずして己を切る」。禅の道の、そして剣の道の奥義であった。そしてつとつ、大仙寺に身を寄せた武蔵を修業に駆り立てたのは、やはり八百津のありのままの自然だったのです。白い水煙を巻き上げて滝垂に落ちる五宝滝は、まさに幽玄の世界。一の滝、二の滝、三



五宝滝

の滝と、三連にも及ぶ五宝滝は、武蔵が生きた時代そのままに、溪谷を銀色に染め上げて。この滝のさらに奥に踏みいると、いにしえの時代から修験僧たちの修業場だったといわれる、円明の滝、二天の滝が、飛沫をたてて流れ落ちています。滝のある溪谷は、その名も武蔵溪谷。杉本立をわたる風は冷たく、時折聞こえる野鳥の鳴き声は、時間を止めて。昼なお暗き溪谷に、武蔵の心は今も漂っているのでしょうか。「人を切らずして己を切る」。禅の極意は数百年を越えたいまでも、人の心を捉えて離すことがありません。

●水辺で遊ぶ鴨の親子連れ

名神高速道路・小牧ジャンクションから中央自動車道へ針路を変えて約二〇分。土岐I.C.を下りて、国道二二号線に乗り継ぎ、穏やかな山村風景を眺めながら鬼岩から御嵩を経て八百津へ。そもそも八百津とは、地名のごとく八百の津、つまり湊を擁していたところ。数の真偽は定かではありませんが、それほど多くのあるいは大規模な川湊を抱えていたのでしょう。

木曽川沿いに開けたこの町は、今のよう陸上交通が発達する以前、河川や水路が主要な輸送路であった時代に、水運の拠点として栄華を極めていたのです。しかし、木曽川に発電所やダムが建設されるようになると、船着き場もすっかり姿を消しました。時代の風雪で川の流れが変わっていくように、歲月の流れとともに変貌を余儀なくされました。そんな木曽川の瀬には、水浴びを楽しむ大鷺の群れ。大鷺を横目に、スイスイと滑



銀盤のような水面に緑の山脈が深い影を落としこむ。薄日ささめく川べりにつがいの鷺が二羽。移りゆく時を見つめている。空と川とを分かつのは、赤い橋。冬の日の風景は遠い昔話のように、やさしい音色を奏でていた。るように泳ぐ一対の鴨。「ここにいてしまった鴨もいるようです」と土地の人は教えてくれましたが、どうやらここは自然のサンクチュアリ。様々な小鳥がとびかい、タヌキ、イノシシが歩き回る自然の聖域が守られているのです。ダムととも生きる八百津町には、生まれたままの自然がたおやかに、訪れる人々をやさしく抱きとめているようです。

●愛と正義の人、センプオ・スギハラ

八百津町といえば、センプオ・スギハラ。第二次世界大戦という戦禍の渦にあつて、ユダヤ人にビザを発給し続けた、いわば愛と正義の人。彼の生家は、町の北、北山集落にあります。一九〇〇年元旦、杉原千畝は父好水、母つやの次男としてこの世に生を受け、幼少の日々を八百津で過ごしています。しかし税務所員であった父の転勤に伴い、名古屋へ。愛知県立第五中学、早稲田大学で学生時代を過ごした後、堪能であったロシア語を買われ、外交官の道を進むこ

美しき川面に映る、問わず語りの人間模様

とになったのです。

一九三三年、リトアニア国・日本領事館をカナウスに新設するに伴って、リトアニア領事代理に就任。しかし、この頃から彼の外交官の道に影が差し始めます。杉原千畝の運命を分かちました。その日の記録を彼はこうしたためています。

「それはバルト海沿いの北欧諸国では珍しくない季節の早い、夏の終わりのようななどよりとした日であった。忘れもしない一九四〇年七月末の日であった。六時少し前、表通りに面した領事館の門前が、突然人の喧しい話声で騒がしくなり、意味の分からぬわめき声が高まった。人数が増えるため次第にその声は激しくなっていく。私は急いでカーテンの隙間から外を窺った。何とそれは、大部分が乱れた服装をした老若男女の群れで、いろいろの人の人々がざつと、百人近くも領事館の鉄柵により、争ってこちらに何かを訴えている光景が目についた」



昭和15年 リトアニアの日本領事館に詰めかけたユダヤ人

ナチス・ドイツ軍の逮捕・虐殺を恐れ、カナウスに辿り着いたユダヤ人の群れ。彼らの目的は一つ。ソ連を横断し、日本国を通過し、アメリカへ逃

れるために、どうしても日本国の通過ビザが必要だったのです。領事館を囲むユダヤ人の数は日に日にふくらむばかり。その疲れ切った表情には苦悩が浮かび、母親にしがみつく幼子の表情にさえ、恐怖が走っています。彼は、本国にビザ発給の許しを得るため、三度電報を打電しましたが、その返答はいずれもNO。時あたかも、日独伊三国軍事同盟が結ばれる二か月前のこと、本国からの返答は、予測された結果でもありませんでした。しかも、リトアニアを併合したソ連から、数度に渡る退去命令が下されていたのです。



杉原千畝さん夫婦

「ここに百人の人がいたとしても、私たちのようにユダヤ人を助けようとは考えないだろうね。それでも私たちはやるか」彼は夫人にこうもらし、ついに決断を下したのでした。その日以降、寢食を惜しんで彼はビザを発給し続けました、一枚、一枚、ビザを書き続けたのです。退去をしなければならぬその日も、列車の中で証明書を発行し続けたのでした。一九四五年八月、世界を戦禍に陥れた第二次世界大戦はついに終局を迎えました。二年に渡る抑留生活を終えてやっと日本の地を踏んだ彼を待ち受けていたものは、一通の退官命令でした。外交官を罷免された後、彼は浪人生活の地をふるさとに求めました。岩肌を縫うように流れる清水、谷間に踊る魚。その穏やかな光景に、彼はつかの間の安らぎを得たのでしょう。リトアニアの出来事も、外交官としての職務も決して

近代砂防の祖、 デレーケの功績

治山と治水の一体化を第二に、わが国の治水事業に貢献したデレーケは近代砂防の祖。祖国オランダで培われた水工技術をベースに、わが国の河川状況を徹底検分し、在来工法とオランダ水工技術を融合したデレーケ工法を創案。近代治水事業の幕開けはこうした外人技師たちの努力によって実現しています。

デレーケの水工技術

山のない国、オランダから来日し、近代日本の河川事業にその生涯を傾けたヨハネス・デレーケ。確かに水源をもたないオランダと急流が九〇％以上を占める日本の国状は大きな開きがあり、いくらデレーケが現場で叩き上げた技術者とはいえ、オランダの水工技術をそのまま投入する訳にはいかず、実測調査を繰り返しながら、デレーケならではの技術工法を編み出しています。

ともあれ、その基礎を成しているのは、卓越したオランダ人技師たちの水工技術。デレーケが日本において河川・港湾開発を進めるに当たって用いた水工技術には、三つの基盤があったと考えられます。

第一はオランダの低湿地開発技術、第二は西欧近代土木工学、第三はインドネシアなどオランダが国外で行った開発に関わる技術的蓄積です。

第一の低湿地開発技術は「神は世界を作り賜うた。しかし、オランダはオランダ人が作った」といわれるように、ライン川河口部に位置するオランダは、十八世紀フリードリヒと大王によるバルト海沿いの低湿地開発以来、運河の掘削、河川の改良、堤防の築造、排水路の設置など、さまざまな水工技術を駆使し形成された国。その歴史的蓄積により、オランダは独

自の水工技術を形成していききました。

第二の西欧近代土木技術とは、フランスにおける数学を基盤とした力学と水理学、イギリスにおける実用工学の色彩の濃い土木し技術。デレーケは西欧近代工学を学びながら、様々な河川改修計画を立案しています。

第三の基盤は、オランダの植民地における開発によって蓄積された技術。インドネシアのジャワ島ではダム・建設、用水路・排水路・水門の整備が行われています。デレーケは砂防や山林保護に関する提言の中で、インドネシアの事例についてしばしば言及し、インドネシア事業に関する知見は、技術知識の重要な一部をなしていたのです。デレーケはこうした技術的知識に加え、三十年にわたる日本滞在生活中で日本の河川事情などを詳細に実地検分。独自の河川計画思想を発展させています。

デレーケ工法の創案

デレーケは明治六年に来日すると、早速『柴工水刳』を著し、粗朶水制を日本に紹介しましたが、翌年には『砂防工図解』『淀川改修土砂阻塞の件』を著し、近代砂防工法を日本に紹介しています。これは、現場技術者のバイブルともなるもので、いわば近代砂防工法の礎。滞在三〇年間に渡って砂防事業を治水の観点で指導したデレーケは、特に山腹工の重要性を説

き、当時実施されていた日本古来からの工法と粗朶及び編柵を多用したいわゆる「デレーケ工法」を創案しています。

この工法の内容は水源山地での表面侵食防止を森林の砂防的機能に求める、いわゆる山腹工事。明治八年、デレーケは自分の考案した工法を試すために、木津川の支流不動川の水源、京都府相楽郡岡田村（現在の山城町）で砂防工事の試験施工として、石堰堤、柴工護岸、連束藁網工、植木植付などの十六種を選んで実施し、併せて現場職員教材としたことは、有名な逸話となっています。

しかしながら、この一帯はもとどと花崗岩が風化した凝集力に乏しい地質で、常に土石流の危険にさらされていたところ。こうした厳しい自然条件下でおそるデレーケは、土質、地理的条件、工法や材料、植えつける植物の適否がはつきりするまでは、何度もの失敗を繰り返したはず。こうした試行錯誤の末に「デレーケ工法」は誕生しています。

明治十年、木曾川下流計画を立てるに当たって、木曾、長良、揖斐の各河川を調査したデレーケは、その結果河川の改修とともに流域の崩壊土砂の流出を抑えるための砂防工事を施工すること、かつ山地の厳しい取り締まりを厳重に行うことの必要性を力説しています。

明治十一年には、揖斐川筋の砂防工営場などを巡視しています。その中に、養老山地南部、巨石堰堤が築造された磐石谷や羽根谷（岐阜県南濃町）などの工事現場などもあったこと。南濃町太田の曾根三郎（明治四年、昭和二年）が書き残した「回顧録」には、デレーケの足跡を知る次のようなエピソードが残されています。

「この三川分流域地点において、木曾川に出た水が長良川に逆流し、あるいは揖斐川に逆流するというような事があつて、年々非常に困らされていた訳であります。これを防ぐには、どうしても三川を分流してそれぞれ海に注ぐようにしなければならぬということになったのです。これより先、その設計のためにオランダ人のデレーケという人がこの地方に来られました。この人が私の家の本宅で椅子にかけ

て昼飯を食べてもらったのを、幼心に記憶しております」

この頃、この地方に椅子を使うという習慣はありませんでした。曾根家では畳に座る習慣のないデレーケのために、わざわざ椅子を作ったのです。その時、七歳であった三郎少年には、見慣れない外人の様子が強く印象に残ったに違いありません。

この地方を視察し山林伐採を目の当たりにしたデレーケは、次のような提案をしています。

- （１）山林の樹木をむやみに切る事の禁止
- （２）樹木の植付栽培
- （３）砂防工事の実施

こうした提案があつたからこそ、南濃地方の砂防工事は始められたでしょう。羽根谷の巨石堰堤は明治二十四年に竣工。砂防の大切さを力説したデレーケは近代砂防の祖と呼ばれています。

デレーケに対する評価

日本におけるデレーケの評価は極めて高く、静岡県の大塚金吾、原明善が主宰する治水協会の機関誌『治水雑誌』はデレーケの在日中の明治二十四年に刊行した第二号で次のように述べています。

「宴ニ外臣ノ列ナリト雖モ鞠躬盡力枚挙ニ遑アラス中略ノ拮据精勵終始一ノ如ク能ク其職務ヲ尽セリ蓋シ長工師ファン・ドールン氏ニ繼キ本邦治水工事ノ基礎ヲ確立セシモノナリ」

また、（社）土木学会が昭和十七年に刊行した明治以後本邦土木と外人はデレーケを評価し、こう記しています。

「彼の計画は其の後明治大正時代に於て政府企業の河川港湾に合致せるもの多く、其の卓見誠に敬服に値するものなり。本邦土木に偉功を樹てしこと、長工師ドールンに譲るざるのみならず、却つて此を凌ぐものあるを思はしむ」

しかしながら、デレーケをはじめとするオランダ人技師には、様々な批判も寄せられています。

本の近代治水事業を語る事はできません。

昭和三年「洪水論」を発表した高橋裕前、東大教授は、デレーケの治水の特徴を▽山林の重視▽上・下流の河川「帯観」▽合理性、経済性を考慮して立案したこと、を挙げた上で、こう述べています。

「デレーケが示した河川計画における合理性は、わが国の治水計画に強い心を与えたが、河川「帯思想」は根ついたとは言えない。それは彼の帰国後、河川の行政条件が変わったためである」

「デレーケは確かにオランダで技術の基礎を学んだが、彼はむしろその技術を日本の川の現実から学びとり、オランダで徹した彼の技術を日本において育んだというべきである」

治山治水を第一に日本の河川改修に一生を捧げたヨハネス・デレーケ。こうした先人たちの延長線上に現在の治水事業が成り立っているといつても過言ではありません。

参考文献

- 『昭和五十九年度 木曾、長良、揖斐、環境調査業務報告書』建設省木曾川下流工事事務所発行
- 『木曾三川流域建設省中部地方建設局発行』
- 『木曾三川とその流域と河川技術建設省中部地方建設局発行』
- 『デレーケとその業績建設省木曾川下流工事事務所発行』
- 『デレーケとその二文明開化の日本へ近代土木技術を移したデレーケとエッセル』工学博士土林好之著
- 『砂防に挑んだ人々』南濃町発行
- 『明治以後』本邦土木と外人（社）土木学会
- 『淀川百年史建設省近畿地方建設局発行』
- 『日本砂防史』全国治水砂防協会発行

木曾川改修のあらまし

明治政府は西欧の近代技術を導入し、抜本的な改修、すなわち完全な三川分派計画を策定し、蘭人技師ヨハネス・デレーケの監督のもと、明治二十年に着工しています。その目的は①洪水防制②堤内の排水改良③舟運路の改善であり、そのうち①と②が重点課題。高水工法を主体に第一期から第四期にかけて工事は行われ、明治四十五年には完成、三川分派を実現しています。

歴史ドキュメント

私は筑後川の流域の出身ですが、昨年縁あって木曾川の改修の仕事に携わっています。実は筑後川の明治改修工は、木曾川と



木曾川下流工事事務所長
田中慎一郎

木曾川と筑後川は同級生

また、淀川上流域の砂防工事でデレーケの指導を受けた市川義方は、のちの著書「水理真実」でデレーケ工法は大部分有害無効だったと極言しています。

しかしながら、山腹の砂防工法は、地域ごとに条件が違ふこともあつて、その確立までに多くの先人たちの失敗を必要とするもの。したがって、ただ一人、外人技師として長年日本に

同じ明治二〇年四月なのです。木曾川が四月一日、筑後川は四月二〇日です。ともに大洪水の被害に苦しんできた流域の人々の熱意が近代改修の着手として実を結んだのです。両河川ともに面白いのは、木曾川の「三川分派・筑後川の「シオートカット」、と言う基本構想は、ともに御雇い技師や我々の大先輩の日本人技師が編み出す遙か以前より、地方の治水熱心家が唱え続けていたことなのです。木曾川では高橋示証、筑後川では橋原平左衛門がそうです。これらの治水熱心家の着想が近代工学の裏打ちを受けて計画が煮詰まっていくなかで、もう一つの共通点は、筑後川にもデレーケの足跡が刻まれていると言つていいです。

同じ明治二〇年四月なのです。木曾川が四月一日、筑後川は四月二〇日です。ともに大洪水の被害に苦しんできた流域の人々の熱意が近代改修の着手として実を結んだのです。両河川ともに面白いのは、木曾川の「三川分派・筑後川の「シオートカット」、と言う基本構想は、ともに御雇い技師や我々の大先輩の日本人技師が編み出す遙か以前より、地方の治水熱心家が唱え続けていたことなのです。木曾川では高橋示証、筑後川では橋原平左衛門がそうです。これらの治水熱心家の着想が近代工学の裏打ちを受けて計画が煮詰まっていくなかで、もう一つの共通点は、筑後川にもデレーケの足跡が刻まれていると言つていいです。

明治十六年のことです。彼が筑後川についてどう語ったか、私としては是非知りたいところですが、未だ資料が見つかりません。

さて、筑後川は着工前年二月三〇日、西村土木局長事件が起きます。一寸したこと、局長の怒りをつつた筑後の治水熱心家に、工事着工に当たつた条件が課せられたのです。当時は河川工事の中の治水費は地方の負担でしたから県会・郡会で治水に関する予算を翌年三月までに通すこと、そして四月までに盛大な起工式を行うことでした。これらの条件を三月月でまとめ上げ、木曾川に遅れること二九日、中流部小森野地先にてようやく起工式を挙げたのです。

波瀾万丈の生涯をおくった ヨハネス・デレーケの素顔

三宅雅子氏

デレーケの人物像

第二回

◆家族の死◆

明治十二年（一八七九）大阪ではコレラが大流行した。府下の患者九千三百余人。死亡者約七千四百人というのだから、何ともすさまじい。コレラ病で死んだ家には黄色い小旗を立てることにしていた。患者や死者が市内を運ばれるのでその臭気はひどく、デレーケは福井県三国への出張をとりやめた程だ。

そのときは川口の居留地はまだ患者が出ていないと、オランダに居るエッセル宛にデレーケは手紙に書いているが、義妹のエルシェがコレラにかかり死亡したところをみると、居留地といえどコレラの蔓延は脱がれなかったのだろう。

あまりの悲しみに実姉である妻のヨハナは腰が長いこと立たなくなつた。彼女は貧血病だったので、来日するときはエルシェも同行し、姉の手助けや子供達の面倒を見ていたのである。デレーケは、子育ては雇いの家政婦では影響があるので、身内で育てたいとの考えをもっていた。エルシェの死はデレーケにも一年間立ち直れないほどの心の傷を与えた。彼女を日本に連れて来させしなかったらと後悔から抜け切れなかったのだ。

その頃、損斐川筋の桑名郡上野輪新田と、安田村に着工しようとしていた矢先、



導流堤

三〇年もの長きにわたつて日本に滞在し、日本の近代土木事業に情熱を燃やしたオランダ人技師ヨハネス・デレーケ。その波乱に満ちた生涯を、中部ペンクラブの副会長・三宅雅子氏に語って頂きました。

まなかつた。それから二年後の明治十四年（一八八二）六月八日、妻ヨハナは、長いむかつきに苦しんだ末、息が絶えたのである。

夫妻が来日した時は二人だった子供も、それから四人生まれ、六人の子福者になつていった。しかしヨハナは、子供を二人生むたびに貧血がひどくなつていった。

デレーケは妻の健康のために温暖な神戸へ引越をする。二人の息子は本国の恩師レブレットの許から学校へ通学することに



筆者とデレーケの孫たち(アムステルダム)

たちにはママは居ない。氣力をすっかり失つてしまったデレーケは、今後何を支えにして働いてよいのかわからなかった。人間デレーケの深い悲しみが、エッセル宛に（上林好之訳）書いた手紙に出ていて、読む者の涙を誘う。日本政府は気付かつて、デレーケに有給休暇を与え、本国へ一時帰ることを許している。

岐阜県の輪中の旦那衆（庄屋）は、香尊の五〇円を届け、この金で墓を建ててくれと言っている。

御影石で建てられたヨハナとエルシェの墓は、神戸再度山にある。筆者は平成二年の七月、三七度の夏の暑さの山を登り、墓に詣つて来た。

異国で散った女二人の墓は、一〇〇余年の年月を経ているため青く苔むし、風雨のためか数條の筋が流れていた。夫と義兄を案ずる涙のように…。

近くに息子エレアザルの小さな墓もあった。これは石の寝棺のように横たわっている。

日本人技官が、デレーケは日本を去つてから上海に工事に来ているから、そのとききつと神戸の墓参りに訪れているのではないかと言われたが、全くその通りなのが後年わかつた。同じ技術者同志として、デレーケの心の動きを理解することが出来たのであろうか。

一時は放心状態だったデレーケも、子供たちのために氣を取り直し、再び働き出すのである。そこには英雄でもなく、天才でもなく、異国に働く一人の技術者としての人間デレーケの姿を垣間見ることが出来る。

◆忍耐◆

一八八五年八月十三日、デレーケは再婚した。デレーケ四二歳、マリアは二五歳だった。縁談をすすめてくれたのは、亡妻ヨハナの弟であった。彼は姉の遺児たちを心配したのである。マリアは結婚してから五人の子を産んでいる。

筆者が会つたのは後妻マリアさんの孫に



ヨハナと妹エルシェの墓(神戸再度山)

なる。長良川畔でお会ひした二年後、筆者は再びオランダの地を踏んだ。児童心理のカウンセラー医であるマリアさんは夫と共に手にフリージャーの花を一杯抱かえて飛行場まで迎えに来た。夫は精神科医である。翌日は貿易会社の元社長であったF a m・J・J・デレーケさんと共に祖父が来日前に働いていたオランエ開門と、墓へ出掛けた。教育費を稼ぐため、悲しみを乗り越えて働いていた祖父の願い通り、子孫たちはインテリ揃いであった。

オランダで、マリアさんの心をこめた料理を食べ、マリアさんの夫がかけてくれたレコードのメンデルスゾーンの曲を聞きながら、異国の川で命を賭けて死んでいた彼らの祖先たちの面影を私は追つていた。

土木プロジェクトは、その計画から完成に至るまで、長い年月と困難に対する忍耐が必要だ。そのことをしゆみ感じながら、デレーケの孫たちと共にオランダの夜を過ごしていたのである。

明治改修で出来た背割堤や導流堤、船頭平開門は、一〇〇余年経つた現在も立派にその役目を果たしている。（完）



三宅雅子氏のプロフィール

作家・日本ペンクラブ会員・中部ペンクラブ副会長、「長良文学」主宰、第七回日本文芸大賞文芸賞・岐阜県芸術文化奨励賞・受賞、デレーケを書いた「乱流」で、土木学会出版文化賞・中部ペンクラブ文学賞特別賞・日本河川協会功労賞・第五回大垣市スイトピア賞を受賞。

●「乱流」は岐阜新聞に連載・平成七年八月C B C四五周年記念スペシャルドラマになり全国に放映された。

なつた。こうして彼は子供供が大きくになると、教育を受けさせるために本国へ送っている。

デレーケが日本に三〇年間も残つたのは、子供の教育費のためだった。彼は高等教育を受けていない自分の立場をいやほど知つていたので、子供にはきちんとした教育を受けさせたかった。そのために彼は身を粉にして働いていたのである。オランエ開門で現場監督をしていた頃、水政省から来ていたレブレットにマンツーマンで数学と力学を学び、図面の引き方や流水の計算などを習った。彼は「レブレット様、レブレット様」と恩師を慕い、子供の教育まで頼んでいる。レブレットの方もよく面倒を見てやつていたので師弟は信頼の絆でしっかりと結ばれていたのだろう。レブレットは後に国立工科大学の教授となつた。

折角神戸へ引越し、デレーケは大阪で一人暮らしをしていたのに妻の病状は悪化し、死亡したのである。デレーケはあれほどせつせと書いていたエッセルへの手紙も書けなくなるほど激しいショックを受けている。一年前、デレーケ夫妻は有馬温泉へ避暑に出掛けている。そのときデレーケは妻に言った。「ドールンも本国へ帰られたが、私達も帰らなければいけないだろう。もし君さえよかつたら、もう少し僕は

■参考文献
デレーケ書簡集 上林好之訳
岐阜県治水史

BOOK LAND

砂防に挑んだ人たち

■南濃町発行



砂防に挑んだ人たち

南濃町羽根谷一带は近代砂防工事発祥の地。背後に擁する養老山地の東側は断層で急斜面であるため、古来から大雨が降る度に、大量の土石流に悩まされ続けてきた。「洲凌」・「砂石留」などは江戸時代に行われた砂防工法、まさに砂防とともに歩み、土石流と闘いながら、その歴史を刻み続けてきた訳である。そんな砂防事業の歴史をわかりやすく紹介する一冊。木曾三川下流改修を計画するため、此地を訪れた近代砂防の祖、ヨハネス・デレーケの素顔をうかがい知ることのできるエピソードも興味深い。

TALK&TALK

日本に居たいのだが」妻ヨハナは思わず微笑んだ。夫の氣持がわかつていたからである。「ええ、いいわ」と、言葉少なく答えた。デレーケはそのことを思い出し、もしあのとき、ドールンと一緒に帰国していたら、彼女は死なずに済んだかもしれない。自分はいつも妻のやさしさに甘えている。ヨハナの心はいつも夫のことだけで満たされていた。それに自分は甘えていたのだ。デレーケの嘆きは深く、日本技官達が氣遣つて開いてくれた三回のパーティーにやつとの思いで出席している。もうあの子



コリンズプラートの街(デレーケの生まれ故郷)

民話の小箱 星降る村のとうもろこし畑

八百津町星ヶ崎

ある夏の午後です。

ボロボロの袈裟をまとった虚無僧が、美濃の山奥にやって来ました。

ちょうど、現在の星ヶ崎集落のあたりです。

むかしむかしの星ヶ崎は、それこそ人馬も通わぬひなびた山村。

谷間にわずかな田や畑があるだけで、

村人たちは、その日、その日の飢えをしるだけで精一杯。

虚無僧にわけてあげるだけの食べ物はありませんでした。

疲れ果て、空腹を抱えた虚無僧…

その姿を見た村の伊兵衛はなんとかしてやりたいと思いました。

「わしの畑にとうもろこしが出来ている。それでも食べてかんにんなされ」

その畑は、小高い山の頂上にありました。

はいずるように、やととうもろこし畑にたどりついた虚無僧は、

とうもろこしを食べ元気になる、

今度は木の枝を集めて小屋を造りました。

吹けば飛ばすような小屋ですが、それでも雨や風はしのげます。

ひと眠りした虚無僧が、山頂から村を見下ろすと、

娘も年寄りも汗を流して働いています。

夜は夜で遅くまで薬を打つ姿が見え、

村の貧しさは手に取るようにわかりました。

「このとうもろこしも、村人の大切な食べ物に違いない。

それを私に分けてくれた。

どうか、やさしい村人に幸運を授けてくだされ」

そして七日目の夜のこと。

伊兵衛は虚無僧のことが気にかかり外に出てみると、

真っ暗な夜空に突然、数え切れないほどの星が現れて、

山の畑に降り注ぎました。

驚いた伊兵衛は、山の畑にかけつけましたが、虚無僧の姿はどこにも見当たりません。

そのあくる年のことです。

山の畑には、まるで星のようにきらめくとうもろこしが実りました。

その翌年も、とうもろこしは大収穫。村人たちは、やと飢えから解放されたのです。

「これはあの虚無僧さんのお陰だ」

そのことがあってから、村人はこの山を星ヶ崎とよぶようになりました。

そして、日本一おいしいとうもろこしのとれる畑の上には今も、満天の星がきらめいています。



●木曽川文庫利用案内●



《開館時間》 午前9時～午後4時30分

《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》 無料

《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曽川文庫

〒496 愛知県海部郡

立田村福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

長良川では河口堰の完成により、河床が高くなっているマウンド部の浚渫を進め、洪水流下能力の向上が計られています。

さて、六回にわたって特集しました木曽三川下流改修、いかがでしたでしょうか。次回からは木曽川上流改修を特集します。

Vol.17 編集にあたっては、八百津町役場、作家の三宅雅子氏にご協力いただきました。ありがとうございました。次回は川島町を特集します。ご期待ください。

●お詫び●

Vol.16 では、御田堤完成の年月日の表記に誤りがありました。正しくは慶長 14 (1609) 年です。ここに訂正とお詫びを申し上げます。

●表紙写真●

上：丸山蘇水湖と旅足橋 下：人道の丘公園モニュメント

『KISSO』Vol.17 平成8年1月発行

発行：建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 〒511三重県桑名市播磨81

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル)

TEL(0594)24-5715

TEL(052)565-1976